

第5章 通学合宿の実際と展開

第5章 通学合宿の実際と展開

第1節 通学合宿の現状～調査から見えてくるもの～

平成13年度社会教育実態調査「地域における通学合宿活動の実態に関する調査研究（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）」には、次の7つの提言がある。

- ① 教育員委員会から「実行委員会」「社会教育関係団体」へ
- ② 一度に多くの参加者よりも、少ない参加者で回数を多く
- ③ 実施期間の長期化を
- ④ 素朴な生活体験を
- ⑤ 通学合宿活動は、子どもの生活体験を豊かにすると同時に、地域の教育力を高める活動
- ⑥ 「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」できる通学合宿
- ⑦ 地域のすべての世代（親・青少年・高齢者等）が参画するような通学合宿

いずれも、全国の市町村・団体等の実態を把握し、地域の教育力との観点から調査研究された通学合宿の展望に関する内容を指摘している。

本年度も約2,000箇所の調査対象団体における実施状況について調査を行った。

その現状から、1ヵ年間の実施状況の変化について若干の分析と結果について述べてみたい。

1 教育委員会から「実行委員会」「社会教育関係団体」へ

実施主体は、教育委員会（平成13年度60%・平成18年度26.8%）から、実行委員会（平成18年度43%）へと変化が見られる。さらに社会教育関係団体（8.7%）や社会教育施設（6.4%）、学校（3.4%）と実行委員会による主催者が関係している。いわゆる、通学合宿を通して、子どもたちへの地域意識が高まり、“地域で子どもたちを見届け、育む”といった地域の教育力の萌芽期が散見できる。

2 一度に多くの参加者よりも、少ない参加者で回数を多く

全国市町村においては、265市町村における実施率（21.8%）、865市区町村の非実施率（71.3%）の中で、参加者の延べ人数17,096人、事業実施平均26.5人の結果であった。黎明期（平成10年以降～15年にかけて）の通学合宿では、20～29人が30%を示し、クラス・学年単位による50人以上といった大きな集団も19.0%あった。現状では、異年齢集団や小集団規模の活動が定着する傾向が見られる。

3 実施期間の長期化を

通学合宿は、「1週間以上の期間を保障した集団生活に効果がある」といった報告から、実施期間の長期化を促す活動を奨励してきた。今回の調査では2～3日間（31.1%）、4～5日間（42.4%）が7割程度占めているが、6日間以上も25.4%である。また、参

加者数は2泊3日が832人と多く、6泊以上80人程度である。

これらから、小集団による施設利用等の効率化と合宿回数の増加を確保し、反復体験を展開する気軽な日常生活の延長として恒常化することが大切である。

4 素朴な生活体験を

通学合宿の良さは、日常的な人間関係と生活リズムの確立にある。とりわけ「基本的な生活習慣の形成」が実体験により育まれる。例えば、炊事・洗濯、起床・就寝の準備、入浴の準備、買い物などなど日常体験していない事柄や生活活動をごく普通に実行できることが必然的に要求される。いわゆる「生活の意外性の体験」である。本調査でも、進んで挨拶をする（65%を超えている）や、仕事・手伝い（67.9%）、友だちとの協力（84.9%）など生活習慣を身に付けていく動機付けが成されている。

これら通学合宿は、協働・協同生活を素朴に実行し、基礎基本的な活動が自然体として形成できるところに意義を見つけることができる。

5 通学合宿活動は、子どもの生活体験を豊かにすると同時に地域の教育力を高める活動

地域の教育力は、子どもたちの居場所を地域社会の人たちが見守り・支援することから始まる。今回の調査においても、通学合宿を実施することにより、子どもたちに対する関心と理解が深まる（67.9%）ことを実感している。さらに、子どもたちの活動を通して、大人自らが地域活動に関心と興味を持つ（57.4%）ようになってくる。すなわち、地域の人々が“子どもたちに教えられ、学びを深める”といった相乗効果によって地域の教育力が醸成される。そのためには、大人たちが子どもたちに「画一的な指示をする」ことは危険であり、子どもたちの主体的活動を側面から見守ることが重要である。

6 「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」できる通学合宿

体験学習では、「ヒト・モノ・心の三位一体」の活動内容が位置づいていることである。そのためには、各施設も関わる人たちも多様な「場（モノ）と職種（ヒト）」の方々が参画し、子どもたち自らが企画及び活動に参加できる条件を整えることになる。

本調査で明らかになったことの一つに、事業の実施主体が、教育委員会から実行委員会に移行し、事業をコーディネートすることが多くなってきたことが挙げられる。そのメンバーの中に教育委員会職員（62.3%）や校長・教頭（59.6%）、PTA（74.6%）、子ども育成会、ボランティア団体などが上位を占めている。これら実行委員会は、財政的な援助・支援を確保し、モノとカネを獲得する条件整備が進めば子どもたちは自由に気軽に参加できる。また、身近な施設の活用、地産地消的な支援体制、地域の文化・伝統の生活プログラムの提供など生活相互の連携が不可欠である。

7 地域のすべての世代（親・青少年・高齢者等）が参画するような通学合宿

世代間を越えた異年齢集団による体験学習には意味がある。小学校低学年（6.8%～20.4%）高学年（68.3%～85.3%）、中学校（9.1%～13.6%）の参加者で圧倒的に小学校4・5・6年生が多い。さらに、食事の指導（保護者20.4%・婦人会等38.9%）、プログラムの指導（教育委員会職員57.4%、施設職員32.5%、子ども育成会21.1%、ボ

ランティア30.9%)など数多くの方々の指導支援があった。そこでは、異年齢者の経験・体験が子どもたちの活動に深く関わり寄与するが、主体は子どもたちの異年齢集団の生活及び自治活動であることが保障されなければならない。

以上、調査から見えてくる通学合宿の現状に関する意義と内容について述べ、地域教育の活性化と子どもたちの居場所の健全化の方向、及び通学合宿の活動理念と内容が実際化できることを期待したい。

(城後 豊)

第2節 通学合宿の効果的な展開

1 子どもは、どんな通学合宿を求めているか？

第一に、子どもが望んでいる通学合宿は、「苦しかったけれども、楽しかった」といえるプログラムであるということに関係者も保護者もふまえておくことが大切である。苦しかったといえるほどの困難も我慢も実感できない通学合宿では、達成感を味わうことがないということ子ども達自身が知っている。子どもは達成感などという言葉を知らないだけである。この点は、むしろ大人の方が認識不足である場合が多い。

第二に、生活体験というプログラムは、年齢が低ければ低いほど効果があがるということに関係者も保護者もふまえておくことが大切である。子ども自身の参加意欲も年齢が低いほど高い。多年にわたる飯塚市立（旧庄内町）生活体験学校の実践でも、小学校4年生から3年生へ、更には2年生へと参加対象者の学年を下げてきたが、常に一番下の学年の応募者が多かった。多くの通学合宿で参加対象学年を下げることにためらいがあるのは、大人である関係者や保護者の側であって、子どもの側には何のためらいもないということ認識しておくことが必要である。

第三に、子どもは2泊よりも3泊を、5泊よりも6泊の通学合宿を体験したがっているということ、関係者も保護者もふまえておくことが大切である。この点も、対象者の年齢をどのように設定するかという課題と同じように、ためらいや困難を感じているのは、子どもではなくて大人の側であるということ認識しておくことが必要である。

このような通学合宿を子どもが期待しているということを前提にして、実際の展開にあたっては以下のような事項について、ご配慮いただきたい。

2 通学合宿プログラム作成と指導上の留意点

(1) プログラムは欲張らない

大事なことは、さまざまなものをプログラムとして入れ過ぎないこと。子どもを急がせないこと。ゼロから準備させて、後片づけまでさせること。大人が手を入れないで子どもに「まるごと体験」させること。そういうふうと考えてやっていると、恐らく子どもがいろんな困難に出会って、我慢を強いられることになる。例えば、料理を作ることだって、同じ作業を繰り返してやらなきゃいけないから、我慢する、何度も繰り返す、それが子どもに少しずつ力をつけていくというふうと考えていただきたい。

計画の段階で、子どもが学校から帰ってきたときに何をやらせたらいいのか、という疑問が出される。余分なことを一切考えないで、子どもに御飯をつくらせること、洗濯をさせること、お掃除をさせること、生活そのものに必要なこと一切を、大人が手を貸さずにアドバイスだけしながら一緒に行動していったら、それで十分である。例えば、夜、特別にプログラムを入れたとして、そのために、「9時になったら〇〇が始まるよ」と子どもを急がせる結果になって、結局、間に合わせるために手出し、口出しをすることが多くなりがちである。

(2) 地域の実態に合わせて、地域にあった型のプログラムを

都会での通学合宿の場合には、例えば、夕食の材料を買いに行くことができる。買い物は、かなりレベルの高い生活行動である。きのう使ったものの残量が幾らあるのか、今日使った金額は幾らなのか、今日、買う肉の種類はどれか、値段もいろいろある。

田舎の場合は、買い物するにも近くに店がないということが珍しくない。気軽に店に連れて行って子どもに買い物をさせるといふわけにはいかない。地域によって、時間をかけてやらせることができる分野と、そうでない分野がある。

(3) 地域との関わりを大切に～もらい風呂を例として～

どこにでも、専用の風呂があるわけではないから、田舎の場合は「もらいぶろ」するということも結構ある。もし、銭湯があったら銭湯に、温泉が近くにあれば温泉に、子どもを連れて行って、共同浴場でのルールを教えるということのも大事なことである。

もらいぶろの場合は、子どもによそ様のお風呂をお借りするというときのごあいさつの仕方、終わった後の石けんや洗面器の片づけ方、お風呂のふたの仕方、一々教えないといけない。

お風呂に入れてあげるということを通じて、地域の大人が子どもの顔を覚え名前を覚える。そのことが毎年ずっと続けられていくと、子どもの安全110番の家が通学合宿をやる度に増えていくようなものである。110番の家を地域に広げていく通学合宿でもある。

(4) 子どもの生活の実行力に見合った生活時程を

子どもの生活作業は、遅かったり早かったり、子どもによって学年によって違うし、あるいは、利用している施設の状況によって違う。印刷物に書かれた生活時間割通りには行かないことが多い。おおよその目安としての生活時間割だと考えたい。それにこだわって、子どもの生活の実行力に合わない生活時程を無理に実行させるようなことは避けたい。

(5) 失敗の勧め～子どもは失敗するたびに力をつける

子どもが失敗することを大人が恐れてはいけない。子どもは失敗するたびに力をつけるのだという確信をもって、あらゆる子どもの失敗体験を見守る大人の我慢が必要である。

(6) 生活上のルール（就寝時間等）はしっかりと守らせる

自主性、主体性を尊重するというのは、その前に、守るべき型やルールを子どもがマスターして、その後の話だと考えておきたい。その土台になる基本の型が守れないレベルの子どもに、主体性や自主性とかいうような言葉であいまいな態度で接してはいけない。通学合宿に参加したといっても、子どもたちは日常の家庭での生活を引かずっているから、1回2回言われたぐらいで簡単に、はいと言って素直に従う子ども

ばかりとは限らない。三浦清一郎氏が言っているように、「1匹の鬼が必要」だと考えておきたい。だめなものはだめだと、守るべき原則はきっちり守らせる。その、きっちり守らせる1匹の鬼がいないと自主性、主体性の美名に隠れて、自由に流れ、放縦に流れてしまう。決められた就寝時刻を過ぎても騒いで寝ないなどという場面で、子どもの自主性を尊重したりしては、もはや通学合宿は成り立たない。

(7) 子ども間のトラブルは二つの型がある

子どもの中で言い争いやケンカが起こること自体は、決して悪いことではない。むしろ、トラブル解決の過程を学習する機会だととらえたい。子ども間のトラブルには、通学合宿の開始とともに原因が発生したケースと、もともと学校や学級の中に起こったトラブルが再燃したケースの二つがある。後者の場合は、学級担任などの助言を得ないと本当の原因にたどりつけないことがある。トラブル発生の場合だけでは分からない場合もある。

3 地域の人間関係を再構築する通学合宿に

通学合宿に取り組むときに、子どもを見る目が半分、残りの半分は協力してくれている大人、親同士、年寄り、この大人のつながりと顔色がどれぐらい明るくなったのか、仲良くなったのか、今まで物も言わなかった年寄り同士が言葉を交わすようになったのかどうか、そこを見て欲しい。地域の大人や保護者のつながりをどうやって密度の濃いもの、レベルの高いものにしていくかという課題に迫る通学合宿でなければならない。

(正平 辰男)